

名大医学部学友時報 2024 6

| 目次 | |
|--------------------------------|-------------------|
| 1. 准教授就任 | 西村 由介 ……(2) |
| | 田村 高志 ……(3) |
| 2. 人事トピックス | 加藤 大輔 ……(4) |
| 3. 瑞流学位審査会のススメ | 炭竈 誠二 ……(5) |
| 4. お詫びと訂正 | |
| 5. 随筆 | 上田 裕一 ……(6) |
| 6. 刑務所で出会った人たち | 渡辺 久雄 ……(8) |
| 7. 読書のススメ | 坂本 純一 ……(9) |
| 8. 第115回名古屋大学医学部学友大会ご案内 | |
| 9. 会員寄稿 | 櫻井 武 ……(10) |
| 10. 名大ネットワークキャリアセミナーのお知らせ | ……(11) |
| 11. クラス会だより | 豪一会 ……(12) |
| 12. 学友会 e-mail アカウント (med メール) | ご利用の会員の皆様への重要なお願い |
| 13. 外科診療体制一覧表(2) | ……(13) |
| 14. 年会費のご請求につきまして | ……(16) |
| 15. 住所変更・勤務先変更のご提出のお願い | |
| 16. 編集後記 | |



時報部員により撮影

准教授就任

脳神経病態制御学講座
脳神経外科学 准教授にしむら ゆうすけ
西村 由介

〈経歴〉

- 2001年3月 名古屋大学医学部医学科卒業
2001年4月 脳神経外科初期研修(社会保険中京病院、厚生連昭和病院)
2007年4月 名古屋大学大学院医学系研究科 脳神経外科 医員
2011年4月 名古屋大学医学部附属病院 病院助教
2011年9月 Clinical and research fellowship in University of Toronto St. Michael's Hospital and Toronto Western Research Institute
2013年7月 名古屋大学医学部附属病院 病院助教
2014年7月 名古屋大学大学院医学系研究科 脳神経外科 講師
2024年4月 名古屋大学大学院医学系研究科 脳神経外科 准教授

〈業績〉

- Nagashima Y, Nishimura Y, Eguchi K, Yamaguchi J, Saito R. Molecular insights and the role of 18F-FDG-PET/CT in the diagnosis of spinal gliomas. Acta Neurochir (Wien). 2024 Mar 27;166(1):154. doi: 10.1007/s00701-024-06039-5. PMID: 38538929.
- Nishii T, Nishimura Y, Nagashima Y, Tanei T, Saito R. Comparative Study of Surgical Outcomes of Occipitocervical and Atlantoaxial Fusion for Retro-Odontoid Pseudotumor. World Neurosurg. 2023 Oct;178:e230-e238. doi: 10.1016/j.wneu.2023.07.038. Epub 2023 Jul 20. PMID:37479027.
- Shiraishi D, Nishimura Y, Ginsberg HJ, Takayasu M, Saito R. Clinical and Radiological Clues of Traumatic Craniocervical Junction Injuries Requiring Occipitocervical Fusion to Early Diagnosis. Neurospine. 2021 Dec;18(4):741-748. doi: 10.14245/ns.2142860.430. 2021 Dec 31. PMID: 35000327; PMCID: PMC8752707.
- Nishimura Y, Thani NB, Tochigi S, Ahn H, Ginsberg HJ. Thoracic discectomy by posterior pedicle-sparing, transfacet approach with real-time intraoperative ultrasonography: Clinical article. J Neurosurg Spine. 2014 Oct;21(4):568-76. doi: 10.3171/2014.6.SPINE.13682. 2014 Jul 18. PMID: 25036220.
- Nishimura Y, Natsume A, Hara M, Motomura K, Wakabayashi T. Interferon- β delivery via human neural stem cell abates glial scar formation in spinal cord injury. Cell Transplant. 2013;22(12):2187-201. doi: 10.3727/096368912X657882. 2012 Oct 12. PMID: 23068051.

学友会の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。この度、2024年4月1日から名古屋大学大学院医学系研究科 脳神経病態制御学講座 脳神経外科学 准教授を拝命いたしました。就任にあたり、当教室齋藤竜太教授をはじめ、多くの方々にご尽力いただきましたことを心より感謝申し上げます。

私は、医学部学生の頃から脳神経外科を志望しておりましたので、2001年に名古屋大学医学部を卒業した後、脳神経外科同門の渋谷正人先生(院長)、池田公先生(主任部長)が大変

活躍されておられた社会保険中京病院で初期研修を行いました。ここで脳血管障害の手術を中心に数多くの困難な疾患に対する顕微鏡下手術を学ぶことができました。その後脳神経外科に入室(故吉田純教授)し、2007年に大学病院に帰局してからは、原政人教授(愛知医大脊髄センター)の脊髄脊椎疾患や顔面けいれん・三叉神経痛に対する繊細な顕微鏡手術に魅了され、脊髄・機能グループに入りました。本グループが対象とする疾患は、生命に関わるよりも、痛みやしびれ、麻痺、顔面のけいれんなど機能的、美容的側面が強い疾患が多く、手術手技がそのまま患者さんの満足度という結果に直結します。このことは、大きなプレッシャーになると同時に非常に大きなやりがいを感じました。手術手技を向上させるため、同じ脊髄脊椎疾患を専門とする整形外科脊椎班(今釜史郎教授)の先生方からも手術手技を学ばせていただき、さらなる広い視野を持ちたいと、英語の資格試験であるTOEFLを受験し、カナダのUniversity of Torontoに2年間臨床留学しました。ここではspine programに入り、Prof. Howard Ginsbergのもとで500例を超える手術を執刀・レジデントの指導として経験し、Prof. Michael Fehlingsのもとで神経幹細胞とナノファイバーを用いた脊髄再生研究プロジェクトにも参加しました。同時に北米のレジデント制度や教育システムを直に学ぶことができたことは貴重な経験で、私の現在の大学院生教育の礎となっています。その後も私と同じUniversity of Torontoのspine programに4人の後輩を留学させることができ、今後も国際交流を続けていきたいと思っています。

外科医として高いレベルの手術手技を目指すことは重要なことではありますが、名古屋大学は日本を代表する研究機関であるので、我々には臨床の知見を生かした基礎研究が求められています。名古屋大学脳神経外科は故吉田純教授から若林俊彦教授(現名誉教授)、齋藤竜太教授につながる最先端の悪性脳腫瘍研究の歴史があります。私も2009年から始めた遺伝子改変神経幹細胞を用いた脊髄再生の研究で学位を取得し、現在は企業や愛知医科大学(大須賀浩二教授)と連携して歯髄幹細胞による脊髄・末梢神経再生の研究を進めています。歯髄幹細胞は安全、安価であることが利点で、それだけでも再生能力が旺盛ですが、我々が取り組んでいる神経転写因子を導入した遺伝子改変歯髄幹細胞はさらなる損傷脊髄の再生能力を示すことが分かってきています。神経外傷だけでなく、手術中の神経損傷の治療としても臨床の場に届けたいという目標を持って研究を続けています。

これまで多くの先生方からご指導いただいたことが私の最大の財産であり、改めて感謝申し上げますとともに、大学病院は研究・教育機関であるという意識を高く持ち、医学部生・大学院生の教育、臨床研究、臨床医にしかできない視点からの基礎研究を通じ、名古屋大学の発展に貢献すべく尽力して参ります。これからもご指導・ご鞭撻のほど何卒よろしくお願ひいたします。

准教授就任

社会生命科学講座 予防医学分野 准教授

たむら たかし
田村 高志

〈略歴〉

- 2008年3月 北陸大学薬学部薬学科 卒業
2011年3月 名古屋大学大学院医学系研究科 修士課程
医科学専攻 予防医学分野 修了
2014年3月 名古屋大学大学院医学系研究科 博士課程
健康社会医学専攻 予防医学分野 短縮修了
2014年4月 岐阜大学大学院医学系研究科 疫学・予防医学分野 助教
2017年8月 名古屋大学大学院医学系研究科 予防医学分野 研究員
2018年10月 名古屋大学大学院医学系研究科 予防医学分野 特任助教
2020年4月 名古屋大学大学院医学系研究科
附属医学教育研究支援センター 先端領域支援部門 特任助教
2021年11月 名古屋大学大学院医学系研究科 予防医学分野 講師
2024年5月 名古屋大学大学院医学系研究科 予防医学分野 准教授

〈業績〉

- Tamura T, et al. Dietary Carbohydrate and Fat Intakes and Risk of Mortality in the Japanese Population: the Japan Multi-Institutional Collaborative Cohort Study. *J Nutr* 2023; 153: 2352-2368.
- Tamura T, et al. Alcohol intake and stomach cancer risk in Japan: A pooled analysis of six cohort studies. *Cancer Sci* 2022; 113: 261-276.
- Tamura T, et al. Association between plasma levels of homocysteine, folate, and vitamin B12, and dietary folate intake and hypertension in a cross-sectional study. *Sci Rep* 2020; 10: 18499.
- Tamura T, et al. Coffee consumption and liver cancer risk in Japan: a meta-analysis of six prospective cohort studies. *Nagoya J Med Sci* 2019; 81: 143-150.
- Tamura T, et al. The association between self-rated health and high-sensitivity C-reactive protein level: a cross-sectional and 5-year longitudinal study. *BMC Public Health* 2018; 18: 1380.

学友会の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。このたび2024年5月1日付で名古屋大学大学院医学系研究科予防医学分野の准教授を拜命いたしました。ここに謹んでご挨拶申し上げます。

私は2008年に薬学部を卒業した後、本学の大学院に入学いたしました。在学中は予防医学分野教授の若井建志先生の指導のもと、がんを含む生活習慣病の規定要因を調べるゲノムコホート研究（日本多施設共同コホート研究：Japan-Multi Institutional Collaborative Cohort Study [J-MICC Study]）に参画し、名古屋市民のピロリ菌感染率の調査や脂質異常症を規定する遺伝要因の探索的研究を行いました。2014年3月に博士（医学）を取得し、他学で助教を務めた後、その経験を自身と後学に活かすべく本学に戻ってまいりました。

J-MICC Studyは日本ではじめての大規模ゲノムコホート

研究で、全国で10万人の参加者を登録しています。私は大学院在学中から15年近く本研究に参画しており、その一地区である「大幸研究（名古屋市民およそ5,100名のコホート研究）」の研究責任者を2019年から務めています。これまでにがん疫学と栄養疫学を中心として、炭水化物・脂質摂取量と死亡リスクとの関連（業績1）、プール解析にもとづく飲酒と胃がん罹患リスクとの関連（業績2）、血中ホモシステイン値および代謝関連ビタミン値と高血圧症との関連（業績3）、主観的健康感と血中炎症マーカーとの関連（業績4）、メタアナリシスにもとづくコーヒー摂取と肝がん罹患リスクとの関連（業績5）などを論文として発表いたしました。また近年、ヒトの食事嗜好性（たとえばコーヒー好きや甘いもの好きといった食事習慣）を規定するユニークな遺伝子座がゲノムワイド関連解析によって同定され、ヒトの食事習慣が後天的な生活環境要因だけでなく、先天的な遺伝要因によっても規定されている可能性があり、注目されています。これまでのいくつかの知見を踏まえて、ヒトの典型的な食事嗜好性だけでなく、炭水化物や脂質、ビタミンなどの各種栄養素摂取量を規定する遺伝要因が存在するのではないかと考えており、大規模ゲノム疫学データを用いて、ヒトの栄養素摂取に関わる遺伝的背景を調査しています。

疫学研究は、ヒト集団を対象として疾病のリスク要因あるいは予防要因を見出し、社会に示していく学問です。私事ではございますが、私は20代の若かりし頃に頭頸部癌で父を失い、その闘病生活を目の当たりにする中で、当時のささやかな人間関係がきっかけとなり、本学予防医学分野の門扉を叩きました。現役の研究者になってからは一部の心無い人間から妬まれたり、蔑まれたりして、肝を嘗める経験もありました。そんな中で、自分なりに現代社会に役立つエビデンスが届けられるように努め続け、本学予防医学分野の先生方ならびに関係の皆さまにご期待をいただいて今日に至りました。

がんをはじめとするさまざまな疾病の発症には、喫煙や飲酒、食事習慣をはじめとする生活環境要因だけでなく、遺伝的要因や社会的な背景が複雑に絡み合っており影響を与えています。身の回りには疾病を引き起こす「原因の原因」もたくさん潜んでいるため、現代の私たちが心身ともに、また社会的に健やかに生きることの難しさを感じています。このような複雑な関係とメカニズムを少しでもひも解いて、疾病予防につながる確かなエビデンスとメッセージを社会に伝えていきたいと考えています。

最後になりましたが、これまでに数多くの方々からご厚情ならびに激励のお言葉を賜りましたこと、この場をお借りしてあらためて感謝申し上げます。本学の名に恥じぬように、これからも研究および教育に邁進するとともに、さまざまな活動を通じて社会に少しでも貢献できるように力を尽くしてまいります。学友会の皆さまには、今後とも変わらぬご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

人事トピックス

日本医科大学大学院医学研究科 感覚情報科学分野 (生理学)

かとう だいすけ
加藤 大輔

〈略歴〉

- 2002年3月 名古屋市立大学医学部 卒業
2002年5月 名古屋市立大学病院第2内科 臨床研修医
2004年4月 公立陶生病院神経内科 専攻医・医員
2008年4月 名古屋市立大学病院神経内科・総合内科 臨床研究医
2012年12月 基礎生物学研究所 特別協力研究員
2013年3月 名古屋市立大学大学院医学研究科 修了
2014年4月 生理学研究所 特別協力研究員
2014年8月 名古屋市立大学病院神経内科 助教
2017年7月 Department of Psychiatry, Neuroscience, & Ophthalmology Icahn School of Medicine at Mount Sinai Postdoctoral Fellow
2019年7月 神戸大学大学院医学研究科システム生理学 特命助教
2019年10月 国立大学法人東海国立大学機構名古屋大学大学院医学系研究科 機能形態学分子細胞学 助教
2021年9月 国立大学法人東海国立大学機構名古屋大学大学院医学系研究科 機能形態学分子細胞学 講師
2024年4月 日本医科大学大学院医学研究科感覚情報科学分野 (生理学) 教授

〈業績〉

- Kato D*, Aoyama Y, Nishida K, Takahashi Y, Sakamoto T, Takeda I, Tatematsu T, Go S, Saito Y, Kunishima S, Cheng J, Hou L, Tachibana Y, Sugio S, Kondo R, Eto F, Sato S, Moorhouse AJ, Yao I, Kadomatsu K, Setou M and Wake H*. (2023) Regulation of lipid synthesis in myelin modulates neural activity and is required for motor learning. *Glia*. Nov;71 (11) : 2591-2608.
- Okada T, Kato D, Nomura Y, Obata N, Quan X, Yano Y, Tachibana Y, Morinaga A, Moorhouse AJ, Matoba O, Takiguchi T, Mizobuchi S and Wake H*. (2021) Pain induces stable, active microcircuits in the somatosensory cortex that provide a therapeutic target. *Science Adv*. Mar 19;7 (12) : eabd8261.
- Kato D, Wake H*, Lee PR, Tachibana Y, Ono R, Sugio S, Tsuji Y, Tanaka YH, Tanaka YR, Masamizu Y, Hira R, Moorhouse AJ, Tamamaki N, Ikenaka K, Matsukawa N, Fields RD, Nabekura J and Matsuzaki M*. (2020) Motor learning requires myelination to reduce asynchrony and spontaneity in neural activity. *Glia*. Jan;68 (1) : 193-210.

学友会の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。この度、2024年4月1日付で日本医科大学大学院医学研究科感覚情報科学分野 (生理学) 教授を拝命いたしました。ここに謹んでご挨拶申し上げます。

私は2002年に名古屋市立大学医学部を卒業後、神経内科を専攻し、公立陶生病院で神経内科専門医として臨床診療を行う中で、神経疾患、特にアルツハイマー型認知症の症状発現機構や病態解明に興味を抱きました。そのため2008年、名古屋市立大学神経内科学教室で行われていた記憶関連因子の研究に

従事し、研究の世界に足を踏み入れました。学位を取得後、認知機能を脳内ネットワークと関連付けることを目指し、頭部MRIを用いた臨床研究により、画像の障害度と認知機能障害の重症度が相関することを実証しました。時を同じくして、この脳内ネットワークの機能基盤となるメカニズムを解明したいと考えるようになりました。この時すでに卒後10年経過していましたが、先のことは考えずに、2013年、基礎生物学研究所・生理学研究所において研究員として本格的な基礎研究を開始しました。2光子顕微鏡、光遺伝学的手法などを用い、脳内ネットワークの機能を計測・操作することで、脳内ネットワークと認知機能との因果関係を実証しました。さらにその後研究を進展させ、この脳内ネットワークの機能基盤の分子メカニズムを脂質分子に着目して解明できたことは、幸運だったと考えております。

このような臨床的・基礎的な経験を積み重ねる中、脳内ネットワークの計測・操作技術をさらなる高みに導きたいと考え、2017年、神経精神疾患研究が盛んなマウントサイナイ医科大学へ博士研究員として研究留学しました。留学中の印象的な出来事として、毎週金曜日にワインを片手に、別の研究室に所属する様々な国籍の人々と研究だけでなく、色々なことについて議論できる機会があり、おおいに異文化に触れることができました。さらに、研究面では、脳内ネットワークの機能を規定する重要な要素として、神経細胞間の結合性があることを学び、生体でこれを計測し、病態との因果関係を解明する必要があると考えるようになりました。そこで2019年に帰国後、最先端の神経科学技術である1細胞レベルで特異的にその機能を計測・操作できる顕微鏡の開発およびその生体応用研究に従事し、神経精神疾患の病態解明に1つの道筋をつけることに貢献しました。

着任先では、生理学、解剖学、神経科学だけでなく、理学、工学などの異分野と幅広く共同研究を行うことで、分野融合の効果を高めることを目指します。また、全身臓器の生理機能を扱う生理学教室がこれまでに培ってきた基盤技術と自身が持つ生体イメージング技術を融合することは、研究における独自性を発揮できる点と思っているため、これらにより日本医科大学の研究発展に貢献したいと考えています。そして、この目標を達成するために、人材育成に重きを置き、日本医科大学の基礎・臨床医学教室と連携し、医学生から大学院生へとシームレスに教育を提供し続けることで、研究に真摯なマインドを醸成しながら、責任感と共感・寛容さが生み出す強さを併せ持つ研究チームを育てたいと考えています。

最後に、これまで温かく見守りながらご指導下さった、松川則之先生・小鹿幸生先生 (名古屋市立大学神経内科学)、松崎政紀先生 (基礎生物学研究所)、鍋倉淳一先生 (生理学研究所)、森下博文先生・Graham Ellis-Davies先生 (マウントサイナイ医科大学)、和氣弘明先生 (神戸大学・名古屋大学分子細胞学)、そして、様々な機会でお世話になった名古屋大学学友会の先生方に心より感謝申し上げます。

瑞流学位審査会のススメ

すみがま せいじ
炭竈 誠二
国際医学教育学

学位審査会は英語では“thesis defense”になりますが、スウェーデン・ルンド大学の様式にのっとり行う名古屋大学・ルンド大学国際連携総合医学専攻（ジョイント・ディグリー・プログラム、以下 名古屋・ルンド JDP）の学位審査会は、正に学生が敵方の口撃から自らの研究成果を“防御”するさまを見ることとなります。

博士課程における学位審査会は学生が自分の研究成果を審査委員の前で発表し質疑を受けた上で、学位授与に値するかを審査される最後の山場です。国や大学によってその流儀が異なります。当医学部の通常の博士課程である総合医学専攻では大学院発表会がこれに当たります。名古屋・ルンド JDP では時間無制限、一般公開で誰でも参加・質問可能、質問が尽きるまでの長丁場（通常3時間）で、外部機関から招いた指定質問者（opponent）がその中核を担います。

本年1月に defense を受けた宇野枢先生は産婦人科 梶山広明教授とルンド大学 clinical genetics 教室 David Gisselsson Nord 教授のもと卵巣癌と Wilms 腫瘍における化学療法抵抗性獲得につき研究、“Cancer-evolution under chemotherapy treatment” という学位論文 (thesis) を携え審査に挑まれました。彼に対する opponent はカロリンスカ大学病院より招聘した小児腫瘍を専門とする Nikolas Herold 准教授。宇野先生の30分のプレゼンの後、Nikolas 先生の最初の質問は「化学療法が癌細胞の進化を誘導したのか、治療前やその過程に癌細胞に存在した何らかの変化を選別しただけなのか？」でした。虚をつかれたのかしぼし沈黙の後、宇野先生がこれに答えます。実際のところは opponent の質問は口撃というより多分に教育的であり、時間制限がないことは学生にも猶予を与え、考えを深めながら回答できます。質疑応答というよりは“対話”といったところでしょうか。聴衆としては聴き応えがあり楽しめます。opponent との1時間半の質疑の後に3名の審査委員（1名は外部から招聘、金沢大学分子細胞病理学 前田大地教授）、その他参加者からの質疑と続き、すべての質問

に回答し計3時間半の闘いを終えたところで合否審議、学位授与が承認され無事合格となりました。

この defense に至るまでに必要単位を履修、研究成果を出し、分厚い thesis book を書き上げたうえで事前審査を通過しているわけで、ねつ造や盗用などの不正がない限り defense の出来不出来で落ちることはほとんどありません。しかしながら学生はこの困難を通して研究をふり返りその意義を考え、独り立ちするのだと感じます。本専攻では2022年の第一号、産婦人科 安井啓晃先生、2023年の口腔外科 Dong Jiao 先生に続き3人目の学位授与です。現在脳神経内科の小原一輝先生が在籍されています。今後も多くの先生に挑戦いただけることを願っております。

* 国際連携総合医学専攻について：名古屋大学医学部と海外のパートナー大学医学部とが共同で開設する4年間の博士課程プログラム。在籍4年間のうち1年以上の留学が必須。修了時には名古屋大学とパートナー大学との連名で学位 (PhD) を授与されます。現在オーストラリア・アデレード大学、スウェーデン・ルンド大学との JDP を運用中で、ドイツ・フライブルク大学、イギリス・ノッティンガム大学と協議中。総合医学専攻 (博士課程) の1年生は JDP に転専攻可能です。

(<https://www.med.nagoya-u.ac.jp/jdp/>)



学位審査会の様子。Zoomを併用したハイブリッド形式にて名古屋大学・ルンド大学合同で開催。コロナ禍が明けルンド大学の教員も来日。ご家族も参加され、晴れ姿をご覧になってみました。審査会後には皆でお祝いです。

お詫びと訂正

2024年4月号掲載 最終講義 木山 博資 p5左段下から11行目 誤：2013年 正：2011年

著者の誤りでした。お詫びの上訂正させていただきます。

随筆 ラグビー・人生の学校

うえだ ゆういち
地方独立行政法人 奈良県立病院機構 理事長 名古屋大学名誉教授 上田 裕一 (神戸大学 1976年卒)

2023年は、学友時報部長 梶山広明教授と親しくお話しする機会に恵まれた。最初の出逢いは1月7日の碓氷章彦教授の定年退任祝賀会兼 六鹿雅登教授就任祝賀会であった。心臓外科学講座の教授は奇しくも私から3代続いてラグーマンが就任したので、テーブル席の私から壇上の碓氷教授にラグビーボールをパス、それを碓氷教授から六鹿教授へパスという趣向を準備した。室内の宴席に見合わない私の早いパスに参会の方々は驚かれ、大いに盛り上がった。その後の挨拶では、「ラグビー精神の“One for All, All for One”はよく知られているが、後半の“for One”は“一人のため”ではなく、私は一つの目標を達成するためと理解しており、我々の All for One は名古屋大学病院心臓外科で手術を受けられる患者のために、そして講座の更なる発展のためである」と付言した。その直後に、梶山教授から「六鹿教授とは同級生で、ラグビー部でも一緒でした」とお聞きし、一瞬にしてラグビー同志となったのです。11月には日本医学歯学情報機構の会合でも隣席となり、この学友時報へのラグビーに関する寄稿を依頼されたのです。

私のラグビーとの出逢いは、1967年大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎の体育の授業でした。大阪教育大学の教員であった辻野 昭先生(1990年「実戦ラグビーの科学」を出版、後に兵庫教育大学 学長)はラグビー日本代表のトレーニングコーチも担当されており、冬の授業は3年間ラグビーであった。ラグビー部はなかったが、4クラス対抗戦を企画していた。ラグビーの魅力に私は取り憑かれ、通学の近鉄電車で行くラグビー場(当時は試合のある時だけ止まる臨時駅)によく足を運んだ。1970年4月に神戸大学医学部に入学したが、大学紛争の影響がまだ残っており、六甲台の教養部キャンパスの校舎はロックダウン状態で、医学部ラグビー部の練習だけに通っていた。キャンパスが戻った後は、月曜を除いて連日練習、土曜あるいは日曜に試合という体育会系であった。9月の熊本での西医体では、1年生で参加したが決勝戦で破れ2位であった。その後の西医体の戦績は、1971年名古屋瑞穂ラグビー場で3位、73年(金沢)は優勝、74年(神戸)は主幹校でキャプテンを務めたが、決勝戦は突然の豪雨で水浸しとなり、当時の皮のラグビーボールは重く滑って、無念の2位に終わった。すでに50年が経過しているが、当時のメンバーは折に触れ集っている(5人が教授となった)。



準決勝：7番フランカーが私。当時は選手を持ち上げるのは反則

1970年代前半には、イングランド、ウェールズが相次いで来日し、日本代表との対抗戦を花園ラグビー場で観戦した。とりわけ、ウェールズのフルバック JPR ウィリアムズ(整形外科医)は長髪を振り乱しての比類なきランニングスキル、さらに彼の強烈なタックルは記憶に焼き付いている。奇しくもJPRは本年1月、74歳で逝去された。彼の往年の活躍をYouTubeで見ることができます。#jprwilliams あるいは <https://www.youtube.com/watch?v=Zdwz7T2AWOo>

1976年神戸大学を卒業後、私は天理よろづ相談所病院のレジデントとなったが、病院にはラグビー部があり、西医体や関西西医歯学ラグビーで対戦した医師とも再会した。天理市内にはゴールポストのあるグラウンドが5面あり、秋にはリーグ戦にも参加し、30代後半までラグビーを楽しんだ。また、奈良県ラグビーフットボール協会メディカルソサエティの員としてグラウンド・ドクターを務めていた。親里ラグビー場ができ、海外の代表チームは花園ラグビー場での日本代表との試合の数日前に天理で宿泊して練習を行っていた。ニュージーランド代表オールブラックスが来た時は、彼らの練習を見るために病院を飛び出して親里ラグビー場に足を運んだ。当時のランニング・パスの練習は横に整然と並びながら後ろのメンバーにパスをする(ボールを前にいるメンバーにパスをしてはならない)のだが、彼らは縦横に並んでクロスしながら、後ろのメンバーにパスをしているのには驚いた。まさに縦横無尽に選手をすり抜けながら見事なパスをしていた。

1985-86年はロンドンのNational Heart Hospitalに臨床留学する機会を得たが、秋から冬季の週末にはイングランドのラグビーの聖地 Twickenham Stadium やウェールズの聖地 Cardiff Stadium で観戦した。当時、木造の Twickenham Stadium の大きさには圧倒されたが、現在の大きなスタジアムは8万人を収容でき、まさにイングランド・ラグビーの聖地である。

1998年秋、私(当時は天理病院の心臓血管外科部長)を含む40代の日本胸部外科学会の会員でラグビー経験者の数名が「日本胸部外科学会ラグビーフットボールクラブ(JATS-RFC)」を立ち上げた。試合をするわけではなく、ラグビー経験者や愛好家が学会の夜に集まってラグビー談義を楽しむ趣旨で、東京での学会では、夕刻に秩父宮ラグビー場近辺のバブに約20名が結集した。翌1999年8月に私が名古屋大学胸部外科学教授に就任したので、10月5日仙台でのJATS-RFCでは、写真の盾をいただいた。



この盾は、英国のラグビーのテストマッチ（国を代表しての試合）に参加した選手に贈られる伝統に習ったもので、ラグビー日本代表選手に与えられる帽子（キャップと称し、試合数により〇〇キャップ）と盾があるが、その盾を作成する工房で特注していただいた。なお、盾のロゴは日本代表の桜のエンブレムの裏に“メスとハート”を配置している。

例年のJATS-RFCでは、日本のトップレベルの監督やコーチ、引退されたトップレベルの選手を招待して、ラグビー談義に花が咲き、楽しいひと時を過ごしてきた。全くレベルの異なる医師の元ラグーが、トップレベルとの初対面でも一瞬にして、あたかも旧友のような雰囲気になって、いつも楽しく歓談できている。

さて、1999年に名古屋大学胸部外科教授に就任した私は、学部内と胸部外科関連施設を訪問し挨拶をしたが、多くのラグビーOBがおられた。その繋がりや医学部を越えて全学のOBの方々にも紹介していただいた。まさにラグビーをしていたというだけで、突然、親交が深まることを何度も経験したのです。この不思議なラグビーの連帯感、親交の深まりについて記したい。

[ダニエル・プティエ著『ラグビー 進化する世界のプレースタイル』白水社文庫クセジュ 916 (2007年7月発行)] より引用

ラグビーは、勇気と連帯と自己犠牲のスポーツであり、ラグーマンという言葉は人の生き方を表現する。ラグビーをすることは、共有する欲望と喜びを介して、日常の決まり事、そして自分自身を超越することである。欲望と喜びの共有は、各プレーヤーがそれぞれ補完しあう自己犠牲と寛容を前提とする。ゲームの規則は、狭義のグラウンドの範囲を超え、個人が地域と、グループと、さらには社会と一定の関係を成立させることに寄与しており、文化に形を与える。ラグビーがこうした特定の価値観を備えた、真のスポーツ文化を形成しているという点で、多くのラグビー関係者や著作者の意見は一致する。「ラグビー、人生の学校」、そう言う声をしばしば耳にする。

この記述の主旨は洋の東西を問わない。年齢、体格、レベルも問わず、ラグビーをしていたというだけで、同僚意識が生まれるのである。学会の招請講演に英国から参加された医師や医療機器メーカーの方々とも然りであった。1997年、アジア心臓胸部外科学会（台北）で出会った米国医療機器メーカーの幹



ウェールズの英雄ガレス・エドワーズ（スクラムハーフ）の銅像の前で
左から 私、ロジャー、六鹿先生

部、ウェールズ人のロジャーは、熱烈なラグーで JATS-RFC にも数回、参加してくれ、今も交流が続いている。

私の Rugby World Cup 観戦の始まりは、2007年のフランス・英国の共同開催であった。ジュネーブでのヨーロッパ心臓胸部外科学会（EACTS）の後、ウェールズの Millennium Stadium（現在は Principality Stadium）で六鹿先生、ロジャーの家族と一緒に、Wales vs Japan を観戦することができた。Wales の上手い試合運びで Japan は敗れたものの、見事なスタジアムとウェールズ独特の街の雰囲気は最高であった。

次の Rugby World Cup は 2011 年秋、ニュージーランドで開催されたが、私は日本胸部外科学会学術総会（10月9～12日）の学会長を務めたので、専らテレビ観戦であった。11月14日（私の誕生日）には、その 2011 のレプリカ・ボールとオールブラックスのジャージ（60）で還暦を祝っていただいた。その後、私は 12月31日に教授を退任しました。

2015年は EACTS の前に、英国での Rugby World Cup の観戦（1日に2試合）の機会に恵まれた。Japan が南アフリカを激戦の末に破った試合「Brighton の奇跡」は観戦できなかったが、Milton Keynes での Japan vs Samoa (26対5) を観戦の後、夕刻には聖地 Twickenham Stadium に移動した。8万人満席の England vs Australia を観戦した。大観衆の雰囲気は圧巻であったが、期待に反して開催国 England が惨敗し、試合後は沈んでいた大勢の観衆に揉まれながらヒースロー空港のホテルに戻った。

2019年は日本が Rugby World Cup 開催国となり、一気にラグビーが注目された。9月28日静岡エコパ・スタジアムでは Japan vs Ireland は 19対12で再び奇跡的に勝利した。そして10月5日、トヨタ・スタジアムで Japan vs Samoa を観戦、38対19でジャパンの勝利で大いに沸いた。そして10月13日

Japan vs Scotland でも 28対21で勝利（プール4戦4勝）し、日本は初めて8強、順々決勝に駒を進めたが、残念ながら Japan vs South Africa 戦では2度目の奇跡は起きず、26対3で破れた。しかし、この実績によって日本でも Rugby World Cup への関心はさらに高まったのはご存知も通り。

2023年のフランスでの Rugby World Cup でも、日本の活躍が期待されたが、Japan は8強に進むことができなかった。しかし、ラグビーの持つ魅力やラグビー精神の理解がさらに多くの人々に深まってきたように思える。

終わりに元フランス代表キャプテンのジャン・ピエール・リーの有名な言葉で締めくくりたい。「ラグビーは子供をいち早く大人にし、大人にいつまでも子供の魂を抱かせる」ラグビー独特の精神と社会的文化が付随していると言える。



碓氷章彦先生と私